

パトチカの最後のコメニウス論をめぐって

——チェコ語テキストとドイツ語テキストの間——

相馬 伸一

(受付 2013年5月20日)

はじめに

本稿の課題は、20世紀チェコの哲学者パトチカ (Jan Patočka, 1907-1977) が残したコメニウス (コメンスキー, Johannes Amos Comenius, Jan Amos Komenský, 1592-1670) についての研究のうち、チェコ語で書かれた2つの論文「J. A. コメンスキーの哲学について」(*o filosofii J. A. Komenského*, 1970), 「ヤン・アモス・コメンスキーと現代人」(*Jan Amos Komenský a dnešní člověk*, 1970) とドイツ語で書かれた「J. A. コメニウスの教育の哲学」(*Die Philosophie der Erziehung des J. A. Comenius*, 1971) との間の主な差異を調査し、それらの差異からどのような示唆が得られるかを考察することである。

パトチカは、フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) やハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) に学び、非主観的現象学の構築に取り組んだチェコ20世紀を代表する哲学者として知られる。ナチズムが台頭するドイツでユダヤ人に対する抑圧のために発言の機会を制限されつつあったフッサールをプラハに招く中心的な役割を果たしたのがパトチカであり、そこで行われた講演が「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学」であった。しかし、パトチカは、ナチズムの支配下に置かれた第二次世界大戦下、チェコスロヴァキアに社会主義政権が成立した戦後、そして1968年に旧ソ連によってプラハの春が鎮圧されたのち、3度にわたって大学を追われたため、その知的キャリアと研究の進展は著しく制限された。1977年には、チェコスロヴァキア政府に人権擁護を求める憲章77の代表的な署名者の一人として活動し、秘密警察に長時間の取り調べを受けた末に死去するという悲劇的な人生を送った。

パトチカは、大学を追われた晩年、いわゆる地下大学において哲学を講じ、その講義は『歴史哲学についての異端的論考』にまとめられた。パトチカの死後、その哲学はまずフランスで注目され、デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) はその贈与論の展開にあたって、パトチカの歴史哲学論考を引いた。その後、憲章77の運動に携わったハヴェル (Václav Havel, 1936-2011) らによってビロード革命が実現されると、チェコでもパトチカの再評価が始まり、チェコ共和国科学アカデミーには附属施設としてヤン・パトチカ・アルヒーフが設けられ、1996年から『ヤン・パトチカ選集』(*Sebrané Spisy Jana Patočky*, Oikoymenh,

Praha) の出版がなされている。この、第 9, 10, 11 巻には、パトチカのコメニウス研究が収録されている。第 9, 10 巻には生前に公刊された論文、第 11 巻は、生前は公刊されなかった草稿の多くが収められている。また、パトチカと他のコメニウス研究者との間の往復書簡も第 21, 22 巻にチェコ語に翻訳されて収録されている。

パトチカは、現象学を中心とした哲学研究とともに思想史研究にも多くの論考を残したが、第二次世界大戦後にカレル大学を追われた際、1954年からチェコスロヴァキア科学アカデミー教育学研究所に職を得たこともあり、1950年代後半からチェコの生んだ17世紀の神学者・哲学者・教育学者であるコメニウスの研究に本格的に取り組むようになった。コメニウスについては、コメニウス自身が世界初の絵入り教科書とされる『世界図絵』や他の多くの教授学著作を残したこと、そして、啓蒙主義の普及に基づいて19世紀以降に国民教育制度が確立されていくなかで、科学革命の思想とは隔たった思想内容があるにもかかわらず、暗黙のうちに啓蒙主義的文脈のうちに位置づけられこと等によって、近代教授学の祖という理解が通説化している。これに対してパトチカは、その該博な知識に基づいて、コメニウスをさまざまな思想史の文脈に位置づけることによって、コメニウスの再読可能性を示した。たとえば、コメニウスにおけるクサヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-1464) の影響や後代のヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1803) への影響を考察した点は重要な貢献と見なされている。

パトチカは、1958年に同じ科学アカデミーの哲学研究所に移ったため、彼のコメニウス研究はそれほど多産ではなくなる。しかし、コメニウスの没後300年にあたる1970年前後、コメニウスをたたえるキャンペーンが張られるなかで、再びいくつかのコメニウス論を発表した。それらが、ここでとりあげる3つの論文及びドイツ語で著された「コメニウスと開けた魂」(*Comenius und die offene Seele*, 1970) である。これらの研究には、従来の研究を踏まえながらも、自らの哲学をコメニウスのテキストをとおして語っているような独自の論調が見られる。また、彼はコメニウスのテキストを実存論的に解釈することによって思想史研究のあり方に一石を投じるとともに、通説的なコメニウス像を覆す論点を提示した。ゆえに、これらの論文は、とくに冷戦後のヨーロッパにおけるコメニウス研究では広く参照されるようになっていく。

さて、本稿が3つのテキストの比較考証を行うのは、それらのテキストの間に相当の異なりがあるからである。ドイツ語で著された「J. A. コメニウスの教育の哲学」は序文と4つの節から構成され、1971年にドイツ・パダーボルンから単独の書物として出版された。チェコ語で著された「J. A. コメニウスの哲学について」は序文と3節から構成され、『スラヴィア』(*Slavia*) 第39巻第4号に発表された。同じくチェコ語で著された「ヤン・アモス・コメニウスと現代人」は単独の論文で、『ヴェスミール』(宇宙) 第49巻に発表された。ドイ

ツ語の論文は、基本的には2つのチェコ語論文をもとにしているといつてよい。「J. A. コメンスキーの哲学について」にないドイツ語論文の第4部の内容は、「ヤン・アモス・コメンスキーと現代人」の内容とほぼ対応する。しかし、ドイツ語のテキストとチェコ語のテキストの間には相当の異なりがあり、パトチカが単純にチェコ語のテキストをドイツ語訳したものとは見なせない。

さらに問題を複雑にするのが草稿の存在である。先に記したように、パトチカは生前に未公刊の多くのコメニウス研究を残した。それらの草稿は、パトチカの死後に当局によって押収される場所であったが、パトチカに学んだ若者が草稿を守り、草稿はオーストリアのウィーンに届けられ、人間科学研究所に保管された。冷戦終結後、草稿はプラハのヤン・パトチカ・アルヒーフに戻った。草稿をもとにした研究からは、公刊された論文においてもパトチカが草稿を用意し、それは公刊されたテキストの内容と異なっているものがあることが明らかにされている。『ヤン・パトチカ選集』の編集にあたっては、第10巻にチェコ語の2つのテキストが収録され、公刊されたチェコ語テキストと草稿に大きな違いがあるものについては、第11巻に収められている。

周知のように、チェコスロヴァキアの社会主義政権下では厳しい検閲が行われており、言論の自由は著しく制限されていた。ドイツ語のテキストとチェコ語のテキストの記述の相違は、当時の言論統制を反映しているとも考えられる。また、パトチカが、ドイツのコメニウス研究者や教育学論議を意識して加筆したとも考えられる。そこで本稿では、ドイツ語テキストとチェコ語テキストの相違を検討し、その相違が何を示唆するかを考察していく。チェコ語テキストについては、基本的には公刊されたものを用いるが、必要に応じてチェコ語草稿も引用する。ドイツ語テキストはドイツのコメニウス研究者でパトチカと親交を結んだシャラー（Klaus Schaller, 1925-）の編集による『ヤン・パトチカ コメニウス研究全集』、チェコ語テキストは『ヤン・パトチカ選集』所収のものによる。

序文について

ドイツ語テキストは6つの段落、チェコ語テキストは3つの段落からなる。第1段落は、ドイツの読者を考慮してか、チェコのコメニウス研究者についての説明的な言及があるほかは、両テキストの内容はほぼ対応している。第2段落も大きな相違は見られない。

問題は第3段落からである。ドイツ語テキストでは、第3段落から第5段落で実存論的解釈ともいべき独自の思想史的方法論が示されている。パトチカは、コメニウスのテキストの魅力は、「学説よりもむしろ、それが湧き出してくる源泉のほうの問題なのではないか」とし、「生き方や実存」こそが問題であるとした [KS: 422-423]。というのは、その実存は

「自らの課題が歴史の中で反復して現れるような状態を醸成し、その中で自らが備える豊饒さ、汲みつくせぬほどの豊饒さを明らかにする」[KS: 423] からであるという。ゆえにパトチカは、コメニウスが示すのは「体系に合せて形成された精神科学の分野としての教育学ではない」とし、単にコメニウスが残したテキストの字句を扱うアプローチに疑義を呈し、コメニウスの姿勢は、「その時代を超えるものを備えており、それゆえ今日なおわれわれに語りかけてくることができる」という [KS: 423]。ドイツ語テキストの第 6 段落は、「思想や著作が生まれたときの動機」を明かすために時系列的な記述をとることを述べて序文を終えている [KS: 423]。

これに対して、チェコ語テキストの第 3 段落で、パトチカの思想史的方法論をうかがわせるのは、「彼の思想の諸段階の文脈の内的表象や体系的な内容との関連における成長の論理はその多くが消え去ってしまった。こうした表象に基づくことによるのみ、われわれはコメンスキーの哲学思想をそれ自体の本性において理解することができ、この基礎に立つことによって、コメンスキーの哲学思想がどれほど今日のわれわれに達し心を揺さぶるのかを決定することができるのだ。」[JP10: 290] という言及だけである。なお、この論文の草稿が見つかっており、序文の草稿は公刊されたものとはかなり異なっている [JP11: 598-599] が、そこで論じられているのは、コメニウスが「ラテン語の扉についての弁明」で述べた「私が教授学について書いたすべては、神学者として書いたものだ」[ODO4: 27] という言及についてである。たしかにこの言及はコメニウスをいかに規定し得るかという問題であり、それはそれとして重要なのだが、思想史的方法論を意図した言及とはなっていない。以下の表の段落ごとの数字は文章数である（以下同じ）。

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備考
1	8	1	6	ほぼ対応。	
2	4	2	4	ほぼ対応。	
3	2	3	4	ドイツ語テキストでは、独自の思想史方法論についての言及が展開。第 6 段落は叙述の手続きについて言及。	この部分に対応する草稿があるが、ドイツ語テキストとは内容も異なり、分量も少ない。
4	3	-	-		
5	2				
6	2				

第 1 節について

第 1 節は、ドイツ語テキストは 17 段落、チェコ語公刊テキストは 11 段落から構成されてお

り、コメニウスの青年期における思想の展開が扱われている。

チェコ語テキストの第1段落は、おおよそドイツ語テキストの第1、第2段落に対応する。最初にコメニウスが青年期に学んだナッサウの改革派アカデミーの知的多様性が言及され、その多様性の迷宮的性格を構成した要件が、宗教界の分裂、科学革命による世界観の動揺、神秘主義的な人文主義的教養といった側面から扱われている。ここまでの記述は、双方に他方にはない多少の説明的記述が見られるが、そう大きな差異はない。続いてドイツ語テキストの第2段落にあたる部分では、ドイツでの修学から帰還したコメニウスがチェコ語で百科全書を著そうとした試みや、『アンチ・キリストについての考察』や『天への手紙』等の初期の著作の執筆背景について考察されている。この部分のドイツ語テキストにはチェコ語テキストにはない迷宮的状况の哲学的含意についての若干の考察が加えられている。その後の部分には大きな言及上の差異はないが、ドイツ語テキストの第2段落の末尾には、コメニウスの思想受容の意義についてチェコ語テキストにはない言及がある。

ドイツ語テキスト第3段落とチェコ語テキスト第2段落、ドイツ語テキスト第4段落とチェコ語テキスト第3段落はほぼ対応し、コメニウスが青年期に影響を受けた後期ルネサンスの百科全書主義や調和の思想について記されている。

ドイツ語テキスト第5段落はチェコ語テキストの第4、第5段落にほぼ対応する。続く双方のテキストの第6、第7、第8段落では、コメニウスの青年期の代表的な著作である『地上の迷宮と心の楽園』（1623年筆、31年刊）の哲学的含意についての考察が行われており、内容はほとんど一致している。

記述にかなりの異なりが見られるのが、チェコ語テキストの第9段落である。この段落は長く、ドイツ語では第9、第10、第11段落に分割されている。コメニウスの思想の実存哲学的含意についての考察がなされており、「コメニウスは実存の具体的・実質的経験に即して考える思想家であり、この点で彼は、同時代の抽象的な理性主義者たちに比べて、人間としてわれわれに近い存在である」というパトチカのコメニウス理解は両方のテキストに見られる [KS427]。しかし、チェコ語テキストではその思想史的系譜についての言及があるのに対して、ドイツ語ではそうした言及がない代わりに、コメニウスが人間の内的な転回を重視したというパトチカの見解がチェコ語テキストよりも明瞭に示されている。そして、チェコ語テキストでは、「すべて、基礎的な迷宮的経験と迷宮の背景を表現するための手段にすぎない。というのは、迷宮からの出口をなおも幅広く示すのは、教育についての哲学思想とその帰結だからである。」「迷宮からの出口は教育である。というのは、教育とは導くことであるが、そうできるのは自身に迷宮を抱き、普遍的な転回を完全に成し遂げた者のみである。」 [JP10: 297] という記述から、コメニウスに対するアンドレーエヤクサヌスの影響が述べられていくのに対して、ドイツ語テキストには、ハイデガーの『存在と時間』に影響を受けた

と思われる「良心の声」についての考察に紙幅が割かれ、次のようなパトチカ自身の考察が加えられている。

「人間は事物ではなく、その現存在の根本において光、透明性であり、明かりである。人間が事物の間に置かれていて、性格や力という点で、また事物との関わりという点で定義されうる存在だということは、見かけのことにすぎない。人間は所与の存在を有するのではなく、人間はその存在を生き、その存在を「担わ」なければならない。そして、この任務の遂行は、人間が自らの外に出て「自らを開くこと」ことよってのみ可能となる。すなわち、人間が全身全霊を尽くし、身を捧げ、もっぱら己から去り行きながら自らに至ることよってのみ可能になる。人間は、日常の世界の中で自らが発見した課題を引き受けながら、自分が何のために必要とされ、用いられ、自ら全身全霊を尽くすかを見てとることよってのみ、自ら自己を見出すのである。」[KS427-428]

このあとの記述は「世界は神の学校である」という理念をコメニウスがどこから得たのかについて、クサヌスの影響について考察している点は双方のテキストで共通するが、ドイツ語テキストの第11段落の方が記述が詳細である。

そして、ドイツ語テキストの第12段落から第15段落に対応する記述はチェコ語テキストにはない。ここでは、同じくコメニウス青年期の著作『平安の中心』（1632年）における哲学的含意が考察されている。この著作でコメニウスは、人間が平安の中心である神からそれてしまう傾向性を「自己中心性」と名づけた。この著作についての教育的含意はドイツのコメニウス研究者シャラーが指摘したもので、パトチカはドイツ語テキストではその点を注記している。さらにドイツ語テキストの第14段落では、次のようなコメニウスの教育概念についてのパトチカの解釈が展開されている。

「人間への救いは、…人間に不意に訪れるような外面的ものではありえない。それは、人間を事物のように手中におさめたり、枠組みの中に押し込んだり、人間に外形を刻みつけるようなものではありえない。問題は、人間を「内面において」救うことである。人間に呼びかけて、それぞれの人間が根本的可能性としてのみ発見できるものへ向かわせること、それぞれの人間がその可能性に向かって突き抜けることができるものへ向かわせることが重要なのである。このように人間の閉鎖性を暴くことは、同時に開放性を発見することでもある。開放性を発見することは同時に、共に遂行することを呼びかけることにもなる。すなわち、他者のうちにも人間の根本的可能性を見出し、この可能性に向かうように呼びかけるということである。人はこの呼びかけに向けて準備し、この呼びかけよって自らを開くのであるが、この呼びかけは、人が自らを救うべくふるまうときに見出されて、呼びかけ自身を救い出す。この呼びかけは、悲惨の深みから人間を引き出すことであり、まさに「教育(educatio)」にほかならない。引き出すということが、実際に人間を人間たらしめるもので

ある。』[KS429-430]

このあとチェコ語テキストの第10段落とドイツ語テキストの第16段落は、『地上の迷宮と心の楽園』とそのひな型を得たアンドレーエの作品との関係が扱われているが、言及はほぼ対応している。第1節の最後のチェコ語テキストの第11段落とドイツ語テキストの第17段落では、当時の千年王国主義の思想的文脈への言及が見られるが、ドイツ語テキストの方がやや言及がやや詳細であり、「世界は神の学校である」という思想がチェコ語『教授学』にも展開されていくという記述がある。

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備 考
1	8	1	11	ほぼ同内容。	ドイツ語テキストにコメニウスの思想受容の特徴についての考察あり。
2	10				
3	9	2	10	ほぼ対応。	
4	10	3	8	ほぼ対応。	
5	10	4	7	ほぼ対応。	
		5	3	ほぼ対応。	
6	6	6	5	ほぼ一致。	
7	10	7	7	ほぼ対応。	
8	13	8	11	ほぼ対応。	
9	17	9	20	かなりの差異あり。	コメニウスの思想の実存的主義的含意について、ドイツ語テキストに詳細な言及あり。クサヌスの影響についての言及が、チェコ語テキストでは簡略化されている。
10	5				
11	16				
12	9	-	-	言及なし。	『平安の中心』とそこで示される「自己中心性」の哲学的含意についての考察。
13	3	-	-	言及なし。	『平安の中心』での形而上学的考察が百科全書思想の背景をなしているとの指摘。
14	7	-	-	言及なし。	以上の考察に基づいた、コメニウスの教育概念についてのパトチカの解釈。
15	2	-	-	言及なし。	同上。
16	8	10	5	ほぼ対応。	

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備 考
17	9	11	6	ほぼ対応。	ドイツ語テキストには、「世界は神の学校である」という思想が『教授学』や『光の道』で展開されていくという言及あり。

第 2 節について

第 2 節は、チェコ語の『教授学』や『自然学綱要』といったコメニウスの1630年代初頭の著作に焦点を当て、ポーランドへの亡命前の哲学的・実存的考察がどのように「教育的」に展開されていったかについて考察されている。この節は、「コメニウスの教育哲学（17世紀30年代初頭の教授学とその他の著作について）」(*Komenského filosofie výchovy (v Didaktice a jiných spisech počátku 30. let 17. století)*) との表題で独立して出版されている。ドイツ語テキストは27節、チェコ語テキストは21節で構成されている。

第 1 段落の内容は、コメニウスが思弁と実践を架橋したという言及がドイツ語テキストに見られる以外はほぼ共通している。コメニウスの千年王国主義的な立場について言及した第 2 段落もほとんど同内容である。続く第 3 段落は、チェコ語『教授学』の哲学的性格の重要性が扱われているが、言及はほとんど同じである。

第 4 段落では、『教授学』における序文が、それ以前の哲学的・実存的考察と教育実践をつなぐ役割を果たしているというパトチカの解釈が論じられているが、チェコ語テキストには青年期の百科全書についての言及がある一方、ドイツ語にはそうした言及がなく、ドイツ語テキストには『教授学』の序文における歴史哲学的な言及があるのに対してチェコ語テキストにはそれがないなどといった若干の相違が認められる。第 5 段落では序文の内容が紹介されているが、言及はほとんど対応している。第 6 段落は、人間の墮落についての目的論的解釈に言及されているが、チェコ語テキストではこの解釈に人間をその使命に導いていく含意があるという指摘が付け加えられている。

第 7 段落は、『教授学』序文についての考察を踏まえたパトチカの解釈が示されているが、まず、ドイツ語テキストのみに見られるかなり長い次のような言及がある。この点は、コメニウスの子ども観そしてその背景にあるとパトチカが考えている教育的な贈与論に触れられている点で重要である。

「コメンスキーが子どもに対してどのような姿勢をとっていたか、もっと見てみることにしよう。子どもの純真さに関する彼の見解は、多くの教義的な見解、たとえばカルヴァン正統派と単に対立しただけではない。彼は多くのピューリタン神学者とは違って、子どものことを「怒りの子」とか「毒蛇」などと呼ぼうとすることはほとんどなかった。少なくとも子

どもは固有の存在であり、小さな大人などではない。コメンスキーにとって子どもは、楽園の可能性を生き生きと証言する存在であり、それゆえ人間の真の可能性を生き生きと証言する存在であった。この意味で、彼にとって子どもは、教育者が上から陶冶を施す対象などではない。逆に子どもは、教育者を刺激して指導という任務に向かわせ、教育に取り組む責任を教育者にもたせることによって、教育者を教育者にするのである。また子どもは教育者に、教育者としての自らの現存在がもつ真の根本可能性をはじめと与える。したがって教育において、子どもは決して純粹に受容する極ではない。それは、教育者が純粹に与える者、贈る者ではないと同様である。こうして諸事に抗して、教育を互いに内的に助けあい、互いに本来的な人間性として認めあうこととして考える見方が、理論的な物象化に対して勝利を収めた。この見方は、コメニウスの思想が進展してゆく中でさらに高まってゆくことになる。」[KS431]

このあと双方のテキストには、人間には「墮落した自己中心性と自閉性という最初の状態から離れて、普遍性や生の全体に向かって開かれる能力、全体から出発して全体に向かって開かれる能力」があり、それが教育の基礎となるという言及があるが、上に引いたドイツ語テキストのような言及がないと、この趣旨は理解しにくい。また、ドイツ語テキストには、ここから学校を組織する必要性が論じられているが、チェコ語にはそれがない。

第8段落は、『地上の迷宮と心の楽園』と『教授学』の内的連関を指摘し、パトチカが晩年に強調した「開けた魂」への言及がなされている。この段落の言及はほぼ対応している。続く第9段落は、『教授学』の教育目的論の意義が考察されているが、両テキストでの言及はほぼ対応している。第10段落は、コメニウスがあらゆる者を対象にした学校教育が18世紀啓蒙の教育主義といかなる点で共通し、いかなる点で異なるかについてのパトチカの考察が展開されている。ここでの両テキストの言及はほぼ対応しているが、ドイツ語テキストで「普遍的贈与 (Universalsendung)」とある部分は「普遍的使命 (universálního poslání)」と表現されている。

第11段落は、コメニウスの普遍主義的な教育内容論について言及しており、コメニウスがルソーなどにも見られる普遍的な人間像を抱いていたことが強調されている。両テキストの言及は共通している。第12段落は教育方法の普遍性について扱われ、コメニウスの教育思想が批判的に言及される際によく引き合いに出される「教刷術 (didacographia)」について、それが決して自動化や非人間化を意図したものではないことが論じられている。両テキストの言及はほぼ同じだが、ドイツ語テキストには、「人間は世界秩序に組み込まれて、歓迎しながら受け取り、教えながら教えられ、助けられるところでもさらに自分を助けるようにならない」[KS434] という加筆がある。

第13段落は、コメニウスが強調する「自然的方法」「ア・プリオリな方法」について考察

されている。両テキストの言及は途中まではほぼ対応するが、段落の後半においては、ドイツ語テキストでは、コメニウスが「類比」の方法を重視した意義について次のような哲学的言及がなされている。

「教授学の技法は、根源的な神の技法に対する一種の人間的な対応物である。それは、哲学する教授学者の脳裏に生じてくる模像なのであり、この模像は、個別的事例を理念にもたらず手順を普遍化し理念化することによって生じる。すなわち、ある存在を「造形・教育 (Bildung)」し、形成し、誕生させることがどのようにして成り立つのか、個別的事例を理念にもたらず手順を普遍的・理念的なものにしなければならないのである。それゆえ教授学は学説であり、技芸一般、生産、産出についての本質直観の上に築かれる。それはいくつもの技芸がある中の一つではなく、まさに技芸そのものである。教授術の成立は、理念——ここでは技芸の理念であるが——の生成を示す事例である。理念は、事前には神の知性のうちにあり、進行中は派生的にさまざまに産出された物や、物質に埋もれた産出物のうちにあるが、事後は人間の知性のうちに存するようになる。そして人間の知性のうちにあっても、理念はさらに引き続き創造力を発揮してゆく。」[KS434]

この言及を見る限り、ドイツ語テキストの方がコメニウスによる教授学の哲学的基礎づけについての考察が丹念になされているといえる。ドイツ語テキストではここで段落が2度改められ、着実・容易・徹底という教授の原理が扱われているが、その言及は共通している。

ドイツ語テキストの第16段落とチェコ語テキストの第14段落は、3つの教授の原理の関係について考察されているが、記述にはかなりの隔たりがある。ドイツ語テキストでは、3つの原理に分割されていることの意味について問題提起されているが、チェコ語テキストでは、ドイツ語テキストでは第17、第18段落で触れられている事項が断片的には扱われるものの、かなり異なった次のような言及がある。ここで引かれているヒュープナー (Joachim Hübner, 1611-1666) はドイツ・ブランデンブルク選帝侯の顧問官で、コメニウスの教授学の基礎づけを厳しく批判した人物である。

『『教授学』の「読者へのあいさつ」の「自然は身分を作らない」「自然はあらゆる事物を均等に扱う」 (§ 3, pp. 43, lat. orig, page 39) といった概念や命題は主要なことがらではない。コメンスキーはここで経験的な観察から規則を推論しており、それは分析的方法にあたるはずである。しかし、技芸を教授するという彼の創造的な観念はただ自然における並行関係を確認して説明するだけである。というのは、このようにして自然的な類比を見出したり、その他の人間の技巧との類似性を見出したりするのは、あらゆる技芸のなかの技芸へと移行させるためであるからであって、こうした異なった領域や圏域で現れているのは単一で同一の「神的な技法」の他の側面なのであり、技巧の観念や人工的な観念ではまったくないのである。コメンスキーが示唆する「自然の基礎」としていろいろな実例が引かれる。それ

らは、卵をかえす鳥、荒野と接木、園芸や建築の技法である。自然の基礎は神的技芸であり、それはただ並行関係を示し確証するだけなのである。ゆえに、ヒュープナーのように過ちをおかしてはならない。ヒュープナーによれば、技芸に携わる多くの者は自然的な経験主義から規則を引き出している。しかし、コメンスキーはあらゆる経験的な行為が可能となる観念論的な基礎に気づいたのである。それは、第一に動物にも第二に植物にも第三に人間個々の技巧にも表されている目的を成し遂げる同一の技巧や方途の共通で正当な特質を見出す「観念論的視点」を前提とするのである。こうして、この発想は一般的な技巧の領域を教授学の技巧の領域に置き換える創造的な方法であるといえる。コメンスキーの原理は証明するというよりも説明するものであった。しかし、それらの原理はなお証明すべき価値があるのであって、単なるメタファーではないのである。教授学というのは、精神の進行の多様性に応じて、創造や成就の方法を見たり壊したりできるように助力するのであり、その結果、非暴力的、自己完結的で、全般的に助言的なモデルが生まれ、それらが一致して力を出すということが認識されることになる。」[JP10: 305]

こうした記述のずれはしばらく続く。ドイツ語テキストの第17段落では、コメニウスの植物や職工の比喩がとりあげられ、着実性という教授の原理について考察されている。これに対して、チェコ語テキストの第15段落は教授の原理について扱っているのは同じだが、記述は大きく異なる。

「教授と教育の着実・容易・徹底というすべての原理は単に有用なだけではない。同時に、創造と産出の提示に明確な印象を与えるのである。とくに農業生産の時代にあっては、暦の移り変わりや天体の状況には実質的な信頼性があった。しかし、これらの個々の原則から集団的な学校教育の有機的な概念の見取り図を引き出す結果、この研究が明らかにしたのは、とくに具体的な制度においてはその資源が持続的で迅速に供給されねばならず、教師も生徒も長時間の四季にわたる時間が必要になるということであった。作業が正確に考え出され計画されるには厳格な時間の組織が必要になる。それによって、人間が第一に自身のうちと相互の間で生き、全体として全体のために全面的に生きるという意味で、人間を全体的にするという始原の目標の視野からそれないようにするのである。こうして細目にわたる諸原理は、全体性から詳細にわたる洗練された記述へと進んでいく。それゆえに、意味深い全体という視野を維持することが必要なのである。そして、このようにして、ある主題に関わっている個人の側以上の何かを教えるのである。全体としてこの原理は、自発性、手を用いた認識や学習活動、知識の抽象化を維持する人間の凝集という特殊な例等といったことと結びついた原理から切り離されない混合物なのであり、重要という以外にない。そしてコメンスキーは、どこにおいても人間生活の全構造を把握しようとしたのである。」[JP10: 305-306]

ドイツ語テキストの第18段落は、ここまでの考察に基づいてコメニウスの教授学の基礎づ

けについてまとめているが、対応する記述はチェコ語テキストにはない。続くドイツ語テキストの第19段落は、教授の原理のうちの着実性の原理が教育学的現実主義の基礎になっているというパトチカの解釈が示されている。チェコ語テキストでは、この点でも対応する言及がない。ドイツ語テキストの第20段落は容易の原理について触れているが、この点でもチェコ語テキストには対応する言及がない。

両テキストの記述に再び共通性が見られるのは、ドイツ語テキストの第21段落とチェコ語テキストの第16段落である。ここでは、コメニウスにおける直観の概念及びコメニウスを感覚論者と見なしうるかという論点が扱われている。しかし、記述には相当の異なりが見られ、チェコ語テキストの記述はコメニウスが18世紀的な意味での感覚論者ではないことが中心になっている。ドイツ語テキストの第22段落は徹底の原理に言及しているが、これに対応する言及はチェコ語テキストにはない。

ドイツ語テキストの第23段落とチェコ語テキストの第17段落は、『開かれた言語の扉』における言語教授の改革と言語論が扱われており、記述はほぼ対応する。ただし、チェコ語テキストには直観という語は用いられていない。続くドイツ語テキストの第24段落とチェコ語テキストの第18、第19段落は、ともにコメニウスの並行論が誤っていることを指摘しつつ、しかしそれが言語への注目をもたらし点論じており、記述はほぼ対応する。ただし、チェコ語テキストの第19段落には、ドイツ語テキストにはない次のような言及がある。

「『開かれた言語の扉』は、(原型ではなくイメージとしての) 視覚的な像と言語の結合を準備し、それが広がるきっかけとなったのである。この著作同様、コメニウスの他の「発明」も外国人の主導や手本から得られていることが知られている。しかし、最初の刺激が忘れられるほど進歩したものである。一方において、同時代人たちは『開かれた言語の扉』の哲学的な意義を知っていたが、他方において、結局のところ第一に注目したのは、教授の実践において生きた言語であったラテン語を教授する際の実際的な手引きとしてであった。」

[JP10: 307]

ドイツ語テキストの第25、第26段落は、チェコ語テキストの第20段落とほぼ対応し、ここでは、コメニウスの教授学が形而上学の考察と並行して成立したことが述べられている。ことにポーランド亡命後の早い段階で著され、19世紀になってサンクト・ペテルブルグで発見された形而上学論考とそこにすでに見られるコメニウスの哲学的見解の特質をなしているトリアーデ論について言及されている。双方の言及は、ドイツ語テキストに新プラトン主義者パトリッツィの言及があるのに対してチェコ語テキストには人名があげられていない一方、チェコ語テキストにはトリアーデ論的な形而上学の考察が、「教育学の重要なモチーフである」という記述がある。

第2節の最後のドイツ語テキストの第27段落とチェコ語テキストの第21段落では、1630年

代初頭の『教授学』、『開かれた言語の扉』、『自然学綱要』が密接な関係にあることが論じられており、内容はほぼ対応する。しかし、末尾の記述には次のような異なりが見られる。

「一見、授業と学校に関する改革案の全体が教会的・宗教的な目標に従属しているようにばかり見えるかもしれない。だが、コメニウスにおいて神学的・形而上学的要素は、根本的にもっとずっと広いことに関する考え、歴史の中で変化するような考えを解釈するための手段となるとわれわれは考える。すなわち、いかにして人間を自らに立ち帰らせることができるか、また、そのための不可欠な手段や条件をできる限り広く準備するにはどうしたらよいか、ということに関する考えを解釈するための手段となるのである。われわれのこのような考えが正しいとすれば、コメニウスの次の基本的な考えもまた真摯に受け取られなければならないであろう。すなわち、教育は意味に満ちた世界を前提とし、この意味を与えることが教育そのものときわめて密接に関連するという考え、それゆえ世界は教育の世界でなければならないという考えである。このような点でコメニウスには、時代に拘束された意義を超える意義が認められる。」[KS438]

「一見して明らかなのは、とりわけ聖書の解釈によって、迷宮からの連れ出しという過程に常に焦点が当てられているということである。これは、コメニウスの計画全体が教会的・宗教的目的における教育改革であったという印象を与える。しかし、われわれが信じるように、コメニウスの教育概念がより広い意味を有するのであれば、教育の形式と内容という中心思想はついには出会うべき共通点を有するにちがいない。それは当時の制約を上回るものだろう。それは、世界を「教育の相から」(sub specie educationis) とらえるということの意味するのである。」[JP10: 309]

内容的には大きくは異ならないが、チェコ語テキストではパトチカのコメニウス理解を象徴的に言い表す「教育の相から」という表現が用いられている。この記述は、両テキストの第3節の末尾にもあり、パトチカがいかにこの解釈にこだわっていたかをうかがわせる。

なお、第2節末尾の記述の違いは、両テキストの序文の相違をうけてものと考えられる。チェコ語テキストの序文では、コメニウスが自身を神学者と見なしていたという事実が引かれていた。ゆえに、コメニウスの教育思想の宗教的基盤を踏まえながら、その教育思想として意義を見出すかという考察がなされていたと思われる。これに対して、ドイツ語テキストの序文では実存論的方法論をとることが述べられていた。そして、こうした問題設定に対応して、単なる歴史的理解にとどまらない、現代に引き寄せた解釈がなされていることができる。

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備考
1	5	1	3	ほぼ対応。	
2	1	2	1	ほとんど対応。	
3	4	3	4	ほとんど対応。	
4	5	4	5	言及の力点に若干の相違あり。	『教授学』序文の歴史哲学的含意についての言及はドイツ語テキストのみ。
5	13	5	13	ほとんど対応。	
6	3	6	5	チェコ語テキストのみの言及あり。	人間の墮落の目的論的解釈の教育的含意についての言及あり。
7	19	7	9	前半と末尾の言及がチェコ語テキストになし。	コメニウスの子ども観、それを支える教育における贈与の視点についての言及。学校組織の必要性についての言及がドイツ語テキストのみに見られる。
8	6	8	5	ほぼ対応。	
9	4	9	3	ほぼ対応。	
10	9	10	11	ほぼ対応。ドイツ語テキストの「普遍的贈与」はチェコ語テキストでは「普遍的使命」と表記。	普遍主義的な学校論の思想的位置づけについての言及。
11	6	11	6	ほぼ対応。	
12	4	12	4	ほぼ対応。ドイツ語テキストの末尾に加筆あり。	教刷術についての考察。
13	12	13	11	段落末尾に異なりあり。そのあとドイツ語テキストでは改段落。言及はほとんど対応。	教授学の哲学的基礎づけについての考察がドイツ語テキストの方が詳細。
14	2				
15	2				
16	8	14	6	大きな異なりあり。ドイツ語テキストでは、教授の3つの原理の関係が概括されているのみ。	チェコ語テキストでは、類比の方法の意義の考察あり。
17	9	15	5	3つの教授原理を考察しているが、記述に大きな異なりあり。	
18	6	-	-	チェコ語テキストに対応する言及なし。	
19	7	-	-	チェコ語テキストに対応する言及なし。	
20	6	-	-	チェコ語テキストに対応する言及なし。	

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備考
21	9	16	8	部分的に対応しているが、記述は大きく異なる。ドイツ語テキストでは、直観概念について扱われている。	チェコ語テキストの記述は、コメニウスが18世紀的な意味での感覚論者ではないことが中心。
22	3	-	-	チェコ語テキストに対応する言及なし。	
23	9	17	8	ほぼ対応。	
24	2	18	1	ほぼ対応。	
		19	3	ほぼ対応。ドイツ語テキストにない言及あり。	
25	7	20	11	ほぼ対応。	
26	6				
27	6	21	6	内容はほぼ対応しているが、結びに記述には異なりあり。	「教育の相から」(sub specie educationis) というパトチカのコメニウス解釈を示す記述はチェコ語テキストのみ。

第3節について

第3節は、ドイツ語テキストは20段落、チェコ語テキストは16段落から構成され、1640年代の『光の道』やその後の汎知学体系の構築について扱われている。

両方のテキストの第1段落は、コメニウスの思想活動が1630年代初頭の3つの著作を基盤にしていることが論じられている。迷宮からの導き出しとしての教育といった言及がドイツ語テキストのみに見られるなどの点を除けば、記述はほぼ対応している。続く双方の第2段落は、コメニウスが汎知学を構想した意図について考察されており、言及はほとんど対応している。双方のテキストの第3段落はコメニウスに特有な哲学的見解である神の三書が扱われているが、双方の言及はほぼ対応している。双方の第4段落は、1930年代にイギリスで発見されたハートリブ文書のなかにあるのが見つかった『汎知学の前認識』を扱っている。ここでは、コメニウスが汎知学に対して懸念を抱いたカルヴァン正統派に対する弁明書を著さねばならなかったことやこの著作の主要な内容についてドイツ語テキストに説明的な言及が加えられている以外は、双方の記述はほぼ対応している。

双方のテキストの第5段落は、コメニウスがイングランドを訪問し、そこでの知識人との交流をとおした汎知学構想の発展について触れている。ドイツ語テキストには、この時期からコメニウスが「活用」という概念が鮮明に現れるようになるという詳細な言及があるが、

この言及はチェコ語テキストでは簡潔に済まされている。このほか、チェコ語テキストには『光の道』についての言及があるのに対してドイツ語テキストには言及がなく、反対にドイツ語テキストのこの段落の末尾に見られる言及がチェコ語テキストにはないなどといった相違が見られる。

続いて、コメニウス研究においては社会改革の構想と見なされている『光の道』について、これは教授学著作の展開なのであるというパトチカの解釈が示される。ドイツ語テキストの第 6、第 7、第 8 段落の記述が、チェコ語テキストの第 6 段落とほぼ対応する。

ドイツ語テキストの第 9 段落とチェコ語テキストの第 7 段落は、「世界は神の学校である」という『光の道』の理念が、光というメタファーから読みとかれており、パトチカのコメニウス解釈のなかでもっとも独創的な言及がなされている。双方の言及はほぼ対応するものの、ドイツ語テキストの「贈与」はやはりチェコ語テキストでは「使命」と記述されている。

続くドイツ語テキストの第 10 段落とチェコ語テキストの第 8 段落は、『光の道』に示されるコメニウスの固有の歴史観とそれに基づいたコメニウスの普遍的な改革構想についての言及がなされているが、双方の記述はほとんど対応している。

このあと、ドイツ語テキストの第 11、第 12 段落では、光のメタファーが贈与と関連づけて論じられるが、これに対応する言及はチェコ語テキストにはない。

両テキストの言及が対応するのは、ドイツ語テキストの第 13 段落とチェコ語テキストの第 9 段落であるが、ドイツ語テキストでは説明的な記述が付加されているが記述はほぼ同じである。

続いて『人間に関することからの改善についての総審議』の構成が論じられるが、ドイツ語テキストの第 14 段落とチェコ語テキストの第 10 段落の記述はほぼ対応する。ただし、『汎啓明』と『光の道』の論点の相違についての言及はチェコ語テキストにはない。また、類比の方法が『教授学』から一貫してとられているという言及もチェコ語テキストにはないなど、若干の相違があるが、記述はほぼ対応している。

『人間に関することからの改善についての総審議』の第 3 部『汎知学』について言及は、ドイツ語テキストの第 15 段落とチェコ語テキストの第 11 段落でなされている。ここでもドイツ語テキストの「贈与」はチェコ語テキストでは「使命」と表記されている。この段落でも記述はほぼ対応するが、ドイツ語テキストの方が記述が詳細である。続くそれぞれの段落は、第 4 部の『汎教育』を扱っているが、やはりドイツ語テキストがやや詳細な記述になっているものの、内容に大きな相違は見られない。そのあとには第 5 部の『汎言語学』がとりあげられているが、ドイツ語テキストの方に説明的な言及が付加されているほかは、ほぼ対応した内容となっている。

ドイツ語テキストの第18段落とチェコ語テキストの第14段落は、コメニウスの教育学は晩年に至って本質的に政治的なものになったというシャーの見解が扱われている。双方の記述はほぼ対応している。ただし、この段落では、ドイツ語で「贈与」とされているのがチェコ語で「使命」と記述されている個所とチェコ語でも「贈与」と記述されている個所が見られる。

続いて第5部『汎改革』の教育学的意義が扱われているが、ドイツ語テキストにある『汎改革』のなかでは、社会状況や経済状況を根本から変革するといったことはまったく述べられていない。この点で、この書はトマス・モアの『ユートピア』やカンパネッラの『太陽の都』と同類のものとは見なされえない。共産主義や社会主義が前提されたり説かれたりすることもなく、それらが成立するための条件や、それが成立した場合の帰結が述べられることもない。それは「状況」の改革ではなく「考え方」の改革なのである。[KS445]という記述はチェコ語テキストにはないことが目を引く。第3節の最終段落では、『人間に関することがらの改善についての総審議』が未完に終わったのは、その社会改革構想自体が「開かれた」ものであったためであるというパトチカの理解が示されている。双方の記述はほぼ対応している。

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備考
1	3	1	2	ほぼ対応。ドイツ語テキストの方がやや詳細な記述。	
2	3	2	3	ほとんど対応。	
3	10	3	8	ほぼ対応。	
4	10	4	8	ほぼ対応。ドイツ語テキストに説明的な記述あり。	
5	6	5	3	内容はほぼ対応しているが、ドイツ語の記述の方が詳細。	コメニウスの「活用」の概念の発展について、ドイツ語テキストでの言及がより詳細。
6	3	6	8	ほぼ対応。	
7	2				
8	3				
9	27	7	25	ほぼ対応。ドイツ語テキストでは「贈与」についての記述あり。	チェコ語テキストでは「使命」と記述。
10	14	8	14	ほとんど対応。	
11	1	-	-	チェコ語テキストに対応する言及なし。	

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備 考
12	8	-	-	チェコ語テキストに対応する言及なし。	光のメタファーと贈与論的解釈。
13	6	9	4	ほぼ対応。ドイツ語テキストに説明的な記述あり。	
14	13	10	8	ほぼ対応。ドイツ語テキストに説明的な記述あり。	
15	8	11	6	ほぼ対応。ドイツ語テキストに説明的な記述あり。	
16	6	12	7	ほぼ対応。ドイツ語テキストに説明的な記述あり。	
17	4	13	3	ほぼ対応。ドイツ語テキストに説明的な記述あり。	
18	6	14	5	ほぼ対応。ドイツ語テキストに説明的な記述あり。	チェコ語で「贈与」と記されている箇所あり。
19	7	15	4	大きな異なり。	ドイツ語テキストでは、『汎改革』が社会主義的な改革構想ではないことを強調。
20	6	16	4	ほぼ対応。	

第 4 節について

最初に触れたように、チェコ語テキストの「J. A. コメンスキーの哲学について」は 3 節で終わっている。これとは別個に著された「ヤン・アモス・コメンスキーと現代人」の内容が、ドイツ語テキストの第 4 節とほぼ対応している。しかし、重要な部分で言及に差異がある。この部分は、ドイツ語テキストが 16 段落から構成されているのに対して、チェコ語テキストは 17 段落からなっている。ただし、チェコ語テキストの第 3 段落から第 7 段落は、草稿にあったもので、1970 年に出版された際には活字にならなかった部分である。この部分の両テキストの内容はおおよそ対応しているが、パトチカの生前においては、この部分はドイツ語テキストをとおしてのみ読者に届いたということになる。

第 1 段落は、チェコ語テキストの方が説明的な記述が多いが、趣旨はほぼ対応し、コメニウス没後 300 年という記念年にコメニウスをとりあげる意義が問われている。第 2 段落も同じ趣旨が論じられているが、記述はほぼ対応している。

第 3 段落からは第 7 段落は、チェコ語では当初出版されなかった部分である。第 3 段落は 17 世紀知識革命以来の自然の支配による「人間帝国」の樹立がもたらしたネガティブな帰結に触れられているが、この部分の記述はドイツ語テキストの方がやや詳細であるが、ほぼ対

応している。第4節では、近代化の帰結としての人間疎外の克服のために、再び人間性について考察する必要性が論じられているが、両テキストの記述はほぼ対応している。続く第5段落は、コメニウスの関心が古代ギリシアの思想家と同様に人間に向けられていたことに言及されている。ここでも記述はほぼ対応している。

第6段落ではコメニウスに示唆を得たパトチカ自身の思索が展開され、「人間性は成し遂げられなければならない可能性」である一方、その道からそれてしまう人間の現実が考察されている。両テキストの記述はほぼ対応するが、下に示すように、ここでもドイツ語テキストで「贈与」と記述されている個所は、チェコ語テキストでは「使命」と記述されている。

「人間性とは「成し遂げ」なければならない可能性なのであり、人間性は贈与のようなものとしてとらえられなければならない。」[KS447]

「人間性とは成し遂げられる必要のある可能性であり、ひとつの使命としてその可能性を獲得することである。」[JP10: 354]

「人間は、自身を人間として見ることができず、人間的な贈与と応答を受けとることができない。」[KS447]

「自身を人間として見ることができず、自身のために、次いで事物のために、つまり全体という意味のために人間の使命や責任を引き受けることができない。」[JP10: 355]

ドイツ語テキストの第7段落は、チェコ語テキストでは生前に公にされなかった草稿部分の第7段落と活字になった第8段落に対応し、ここではパトチカの近代教育批判が展開される。ここで目を引くのが、近代教育が専門人の育成を目標とするなかで「人間」を荒廃させてしまったという指摘であろう。また、D. リースマンの『孤独な群衆』が引き合いに出され、アメリカ社会学に批判が加えられている。ここでの記述はドイツ語テキストの方が詳細な説明が加えられているが、内容はほぼ対応している。

ドイツ語テキスト第8段落とチェコ語テキスト第9段落は、教育が人間への贈与／使命についての知に人間を導くことであるという考察がなされている。ここでも「贈与」「使命」のワーディングの違いを除けば、内容はほぼ対応している。続く段落では、「世界は学校である」というコメニウスのテーゼの解釈がなされているが、パトチカはこのテーゼは「非比喩的な意味」であることを強調する。内容はほぼ対応している。

ドイツ語テキストの第10段落とチェコ語テキストの第11段落では、コメニウスにおいて教育が改善すべき「人間に関することから」の中心であるという意義が確認され、ゆえにそこで志向された教育は、何らかの性格特性に向けてなされるものではあり得ないという指摘がなされている。両テキストの記述はほぼ対応するが、ドイツ語テキストには次のような「人格性」をめぐっての記述がある。

「ここでいう調節とは、ある特定の理念、たとえば「人間性の理念」を現実化するために

は「人格性」が適格であるというようなものである。人はたいていコメニウスに単なる教授学者という烙印を押そうと考えたが、彼が近代の奇妙で神話的な理念である「人格性」について知らなかったことは、本来的な意味での教育学説の入口の前で彼を立ちすくませるものではない。」[KS448-449]

次にコメニウスが晩年に至るにつれて、「真正の人間の社会は教育の社会であり、真正の社会改革は社会を教育に向けて作ることのうちにあるということを、ますます重視するようになった。」[KS449] という見解を強めるようになったというパトチカの解釈が述べられている。両テキストの記述はほとんど対応している。

続くドイツ語テキストの第12段落は、チェコ語テキストでは第13、14段落に対応し、コメニウスが教育の内容知として汎知学を構想した意義が触れられ、その時代性の制約にもかかわらず、近代化の過程における特殊化や技術化への批判的な視点を提供するという意味での新しさが認められるとしている。両テキストの記述はほぼ対応するが、デカルトやデカルト派についてのパトチカの評価や M. シューラーについての言及はチェコ語テキストにはない。

ドイツ語テキスト第13段落とチェコ語テキスト第15段落では、コメニウスの思想の趣旨においては、教育が社会を評価する基準となるというパトチカの解釈が示されているが、ドイツ語テキストの記述が簡潔なのに対して、チェコ語テキストでは次のように詳細な言及が見られる。

「コメンスキーの思想がわれわれにとって意味があるその他の理由は、まさに若き人間の人間性、つまりは教育という観点から社会の目的を区画したということである。それゆえに、社会組織が正当化されるかどうかは、社会組織のなかで深い意味での教育を発展させる機会がどれだけ与えられているかによるのである。ゆえに、教育の発展はその社会の状態を評価し、全体としての人間性を磨きあげるための基準なのである。人間に関することながら、とりわけ人間自身の改善手段は、その規範、基準、目標を引き上げることである。普遍的な改善は、個々人と社会全体が教育的な過程の付添人となる時、つまり人間性に向かう人間の道の付添人となる時、生ずるし生ずるだろう。この人間とは、全体としての人間性のことである。」[JP10: 358]

続いてドイツ語テキストの第14段落とチェコ語テキストの第16、17段落では、コメニウスが教授学から汎知学、そして普遍的改革へと考察を進めていった過程が論じられ、その内容ではなく意図は今日においても課題であると述べられている。両テキストの内容はほぼ対応するが、ドイツ語テキストには、コメニウスの著作の歴史的評価の変遷に関して次のような相当の加筆がある。

「この最後の著作が未完に終わったのは、彼の時代において、彼の思考手段によって、彼

の形而上学的シエマにおいては現実化されなかったからである。またその体系は、『教授学』、『汎知学の先駆』、『開かれた言語の扉』、その他といったコメンスキーの初期の独創的な著作に生じていたものとは完全に変容させられた精神的状態に遭遇したのである。すでに時代は、实际的な知、神学と実証的学問の分離、自然学説の数学的原理に向けられていたものであり、神学と形而上学は嫌悪されていた。こうして、コメニウスの最後の改革著作群は、コメンスキーのノートから出版を意図して精力的に編集されまとめられたものであったが、公衆の無関心に突き当たり、出版されないままになったのだ。それらの著作は、われわれに彼の努力の像の結末を示してくれる。そして、われわれは、人間を真理へと導くという課題に真摯にとりくんだ彼の他の著作と同じように、いかなる帰結において、彼がこの課題を追求する準備ができていたかを、それらの著作から見て取ることになる。」[KS450]

さて、チェコ語草稿にはこの続きがあることが知られているが、『ヤン・パトチカ選集』には収められていない。しかし、ドイツ語テキストでは2段落の続きがあり、現代においてコメニウスの意図を復興させるには「脱学校化」から始めなければならないという、以下のようなきわめて刺激的な考察が加えられている。

「新たな歴史的状況のうちでコメニウス的な教育の中心的な意図を再興させようと望むなら、『大教授学』、『汎知学校』、『汎教育』の著者の字句に対抗する準備をしなければならない。というのは、彼が真正の人間性をめざして人間の陶冶という任務において案出した全体的で合理的な学校秩序は、啓蒙以来、ますます強烈に、まったく正反対の意図によって歓迎されるべき枠組になっているからである。この正反対の意図とは、職業能力や「实际的な生活課題」にむけて人間を準備させる独占的な場としての学校ということである。そして今日、職業生活の全体に教授が拡張しているのは、『汎教育』において、生活の全体としての学校が学校としての生活全体を意味していたのとまさに対極にある。

コメニウスの根本思想を再興させようとするならば、おそらくまずは、「脱学校化(Entschulung)」から、つまり、今日においてユートピア的に映っている生の消耗の否定から出発しなければならないだろう。この生の消耗は労働と業績を準備することであり、(当然その準備自体が労働であり業績であるのだが)、それが今日の教育学の体系を表しているのである。こうして実際の生活の要求とそれを進展させるという要求のために最優先されるのは、学校体系を独特の性格をした途方もない生産部門とは異なる何かとして表現できるということを、われわれがもはやまったく思い描くことができないようにさせるということになる。この生産部門では、業績という手法の効率性が学校体系を強く要求することによってのみ、リヴァイアサンの介入が和らげられる。かすかな驚きにもかかわらず、この生産部門はいたる所にある。もちろんここで、個別分野の教授学や業績志向の教授学に対するニヒリズムを擁護しようというものではない。そうではなく、ただ人間形成の機会と業績知の「正

しい基礎づけ」という問題に気づかせられるようにということなのである。まさに、社会構造との関係では、学校制度の領域において、自己の消耗へと向かうわれわれの生の趨勢が、急激に新たな迷宮の現れを指し示している。この迷宮もまた、部分的にはコメニウスの発見から学ばれたものである。われわれは、継続状態になり、それによって正常であると見せかける絶え間ない危機の時代を生きている。危機の時代を心底から経験したがゆえに、その人生は不安と嘆息のもとで過ぎ去ったと自ら語り、時代に合わないにもかかわらず、奇妙にも忘れることのできない奇妙な人間について回想することは、教育という領域において正常であり健康であるとは何かという問いを提示することに、おそらくは寄与するであろう。」
[KS450]

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備 考
1	1	1	5	ほぼ対応。チェコ語テキストの方が詳細。	
2	6	2	6	ほぼ対応。	
3	6	3	9	ほぼ対応。ドイツ語テキストの方が詳細。	チェコ語草稿にあり。
4	2	4	2	ほぼ対応。	チェコ語草稿にあり。
5	4	5	4	ほぼ対応。	チェコ語草稿にあり。
6	14	6	13	ほぼ対応。ドイツ語テキストの方が詳細。「贈与」についての言及あり。	チェコ語草稿にあり。チェコ語草稿では「使命」と記述。
7	8	7	6	ほぼ対応。ドイツ語テキストの方が記述が詳細。	チェコ語草稿にあり。
		8	2		
8	6	9	5	ほぼ対応。「贈与」についての言及あり。	チェコ語テキストでは「使命」と記述。
9	6	10	5	ほぼ対応。	
10	4	11	3	ほぼ対応。「人格性」についての言及はドイツ語テキストのみ。	
11	4	12	4	ほとんど対応。	
12	13	13	4	ほぼ対応。	デカルトやデカルト派に対する評価はドイツ語テキストのみ。
		14	7		
13	2	15	4	ほぼ対応。チェコ語テキストの記述が詳細。	

ドイツ語テキスト		チェコ語テキスト		両テキストの関係	備考
14	10	16	1	ほぼ対応。コメニウスの著作の歴史的評価の変遷についての言及はドイツ語テキストのみ。	
		17	3		
15	3	-	-	チェコ語テキストに言及なし。コメニウスの意図を現代に蘇らせる方途についての言及。	チェコ語草稿があることが知られているが、『ヤン・パトチカ選集』には未収録。
16	6	-	-		

考 察

さて、以上の比較考証をとおして、ドイツ語テキストとチェコ語テキストの間には、①思想史方法論、②教育における贈与の視点、③教授学の3原理についての哲学的解釈、④近代批判及び近代教育批判の視点、⑤コメニウスの社会改革構想の評価において双方の記述にかなりの隔たりが認められた。

第一の思想史の方法論の評価については意見の分かれるところだろう。ドイツ語テキストで掲げられた実存論的ともいうべき方法論は、テキストを過剰に理念化しているという批判が可能であろう。思想史研究においては思想の事実性の考察が課題であるという立場からすれば、パトチカの主張は過去のテキストを現在の問題に短絡させるという過ちを犯しているということもできる。しかし、パトチカは、綿密な資料考証による手堅い思想史研究をいくつも物しており、そうしたリスクはよく自覚していたはずである。そうであれば、なぜパトチカがこうした方法論を掲げなければならなかったのかが問題となる。

最初に触れたように、最晩年のパトチカは歴史哲学の講述に携わるが、そこでは歴史研究においてはあらたまって論じることが避けられる「歴史の意味」が主題化された。この点から遡ると、パトチカがコメニウスの思想のアクチュアリティにこだわったのには内的な必然性があったといえるだろう。また、コメニウスが「活用」ということを重視していたことも、パトチカを通常の方法論から逸脱させた根拠であったかもしれない。

さらに、思想史なり歴史学なりがその方法の精緻化をとおして研究をさらに蓄積している一方で、それらの蓄積が人間の生にとって一体にいかなる意味（アクチュアリティ）があるのかが厳しく問われるようになった近年の状況に鑑みると、パトチカの方法論を安易に斥けるべきではないと考えられる。むしろ、思想史研究の方法論を再度考察するための示唆と見なされてよいのではないだろうか。

第二の教育における贈与の視点だが、すでに指摘したように、パトチカはチェコ語では「使命」と記した個所の多くをドイツ語では「贈与」と記述している。使命も何らかの与えられることであるとすれば、これは単なる語感の問題にすぎないという見方もできるかもし

れない。しかし、全体として見ると、パトチカはドイツ語テキストにおいて、教育における贈与をコメニウスの教育思想の重要な特質として見ていたと判断される。パトチカは贈与とともにその「受領」を重視したが、受領を可能にするのが「開放性」である。ドイツ語テキストでは、第 1 部の後半でチェコ語テキストにはない、この論点をめぐる考察が展開されている。また、コメニウスの子ども観に触れたドイツ語テキスト第 2 節第 7 段落はチェコ語テキストにないが、ここでもまさに贈与の問題が教育的に考察されている。贈与という概念は一般に経済活動における交換と対置され、宗教的・倫理的・前近代的な営みと見なされる傾向がある。ゆえに、こうした概念が社会主義体制とは相容れなかったとも考えられるが、チェコ語テキストでこうした視点が鮮明でない理由は分からない。

第三に、ドイツ語テキスト第 2 節の中間部で扱われているコメニウスの教授原理についての哲学的考察はチェコ語テキストでは行われておらず、ドイツ語テキストを参照すべき意味が認められる。

第四に、近代批判及び近代教育批判の視点については、チェコ語論文「ヤン・アモス・コメンスキーと現代人」でも扱われてはいる。しかし、かなりの部分は草稿から活字にされることがなかった。さらに、ドイツ語テキスト第 4 節にしか見られない言及がある。それらの言及は、近代教育学の祖と見なされてきたコメニウスのテキストをとおして近代批判と近代教育批判を展開しようという独創的な試みであり、参照される価値があるといえる。

第五にコメニウスの社会改革構想の評価については、それが後の社会主義や共産主義を先取りするものではなかったという言及がやはりドイツ語テキストのみに見られたが、ここには当時の社会主義体制下の言論統制の影響が垣間見られるが、それ以上に重要なのは、この評価が当時のコメニウス研究への批判となっているということである。第二次大戦後の日本にも見られるが、史的唯物論のカノン化のもとで、思想史研究においてもその正当化に仕えるような研究が現れた。トマス・モアの『ユートピア』は社会主義的な改革の先駆的形態であるなどといった理解はその典型であろう。こうした研究は、日本では 1980 年代初頭まで生み出されたが、パトチカは社会主義全盛の体制下で 1970 年代初頭にはこうした批判を行っていたことになる。ちなみに、パトチカは社会主義体制に抗したが、では資本主義体制を賛美していたかというところではない。リースマンの『孤独な群衆』への批判的な言及に見られるように、近代化一般の帰結に強い懸念を抱いていた。

以上、5 点にわたってテキスト間の差異について考察したが、ドイツ語テキストにはチェコ語テキストには見られない論点、チェコ語テキストでは鮮明ではない論点が示されていることは明らかである。ところが、『ヤン・パトチカ全集』では、ドイツ語テキストの内容は、注記もされていない。しかし、これらの論点の重要性に鑑みると、パトチカのコメニウス研究として参照すべきなのはドイツ語テキストであると判断せざるを得ない。ただし、

チェコ語テキストにはドイツ語テキストにはない言及があり、部分的にはチェコ語テキストの方が論述が詳細である場合もある。

現在、パトチカのコメニウス研究のうち、代表的な論文を集成した翻訳出版を計画しているが、本稿でとりあげた論文については、ドイツ語テキストをとりあげることとし、必要に応じてチェコ語テキストとの相違を示すこととしたい。

参 考 文 献

パトチカのテキストからの引用は、以下の略号と巻数及びページ数で示す。

JP: *Sebrané Spisy Jana Patočky*, Oikoymenh, Praha, 1996-.

KS: *Gesammelte Schriften zur Comeniusforschung*, hrsg. v. Klaus Schaller, Veröffentlichungen der Comeniusforschungsstelle im Institut für Pädagogik der Ruhr-Universität, Bochum, 1981.

コメニウスの文献は、下記の略号に巻数とページ数とで出処を示した。

DK: *Dílo Jana Amose Komenského*, Academia, Praha, 1969-.

ODO: *Opera didactica Omnia*, Amsterdam, 1657.

*本稿は、拙稿「パトチカとコメニウス—デカルト的自我論との距離」（『思想』1004号、岩波書店、2007年所収）での考察を、その後入手した資料をもとに修正・深化を試みたものである。

本稿は科学研究費補助金基盤研究（C）「コメニウス教育思想の再解釈に向けての基礎的研究」（平成24年度～平成28年度）の研究成果の一部である。

SUMMARY

On the Last Comenius Study by Jan Patočka

—Through the Comparison between German and Czech Texts—

Shin'ichi SOHMA

This article examines the difference between German text and Czech texts of the study of Comenius (Jan Amos Komenský, 1592–1670) that were written by Jan Patočka (1907–1977), Czech philosopher in the twentieth century, in his later years. His lastly published Comenius study in his lifetime *Die Philosophie der Erziehung des J. A. Comenius*, written in German and published in 1971 is basically seen as the translation by him from his articles written in Czech; *O filosofii J. A. Komenského* and *Jan Amos Komenský a dnešní člověk* both were published in 1970, the tricentenary year from Comenius' death. However, there are considerable differences between the texts.

Through the comparison between the texts, the remarkable five differences were shown. They are the methodology of the intellectual history, the viewpoint of giving in education, the philosophical interpretation on the three principles of teaching in Comenius, the critical viewpoint on the modern and modern education and the evaluation of Comenius' idea on social reform. Given the fact that these points are more elaborated in German text, German version should be more referred.